横穴式石室をもつ古墳の出現

Ⅰ-21-①

６世紀には、入り口を再び開けて遺体を葬ることのできる横穴式石室をもつ古墳が現れます。こうした墓は、地域の有力者やその家族のものと考えられています。
この名取では、山囲古墳がこの時期にあたるものと考えられています。

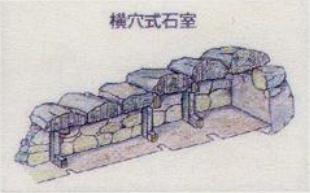
Ⅰ-21-①

石舞台古墳

石舞台古墳は、奈良県明日香村にあります。大きな石を積み上げた横穴式石室をもつ古墳です。つくられた当時は、土でおおわれていましたが、長い年月の間に土が流され、石室が露出しています。蘇我馬子の墓と伝えられています。

Ⅰ-21-②-a

Ⅰ-21-②-b

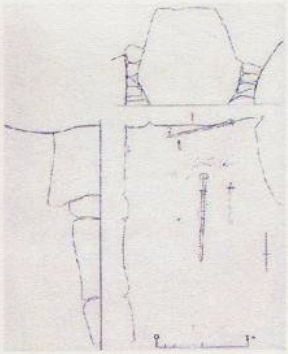


Ⅰ-21-②-c

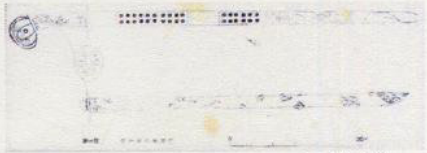
山囲古墳

山囲古墳は、発見当時、日本における頭椎大刀が出土する北限の古墳として知られました。
その頭椎大刀は、昭和２３年の開墾により破壊された石室の残存部分から発見されたもので、金銅で飾った立派な刀でした。

Ⅰ-21-③-a



Ⅰ-21-③-b



Ⅰ-21-③-c

Ⅰ-21-③-d

次第に造られなくなる古墳

Ⅰ-22

Ⅰ-22

６世紀後半になると、古墳づくりは、しだいに規模を小さくしていき、やがて７世紀後半になると、ピタリと古墳づくりが止まります。これは、日本の統一をはかるための国づくりが進んだために、もはや古墳をつくるための特権を与える必要も薄れてしまい、自然に消滅したと思われます。７世紀の終わり頃には、地方の豪族が一地方の役人となってしまい、有力者の力の大きさを見せつけるための古墳が必要なくなっていったのでしょう。

日本の統一をはかるための国づくりとは：
当時、国のしくみを整え、力を増してきた中国大陸や朝鮮半島の国々から、人々を治める方法を学び、それを使うようになりました。このことは聖徳太子の冠位十二階や十七条の憲法のような政治のしくみを法律できちんと決めようとしたことによくあらわれています。

Ⅰ-22